別海町立野付小学校　学校便り

三角帆

◆発行責任者　校　長　青坂　信司

◆発　行　日　平成２４年３月１日

平成２３年度学校テーマ「学び続ける学校」　第１２号

「おんぶ紐」

校　長　青坂　信司

◆大正生まれの母親が、函館で一人暮らししている。母親の誕生日は１月１４日である。来年あたり８８歳になる米寿かなと思っていた。親不孝ばかりしているので、来年の誕生日にはお祝いをしてあげないといけないと思っていた。

◆今年の母親の誕生日に電話をかけた。
「誕生日、おめでとう。来年は米寿だよね。来年はお祝いしないとね」
すると、母親が電話の向こうから次のように言う。
「何、言っているの。今年、８８歳だよ。今年が米寿」
ガッ、ガーンである。てっきり来年が米寿だと思っていた。
「信司、お祝いはしなくていいからね。」と母親は言う。皮肉ではない。心から母親はそう思っているのである。しかし、その母親の言葉を聞いて、私は心が痛んだ。

◆自分の生き方に大きな影響を与えたのは、やはり父親と母親である。職業柄「人の生き方に一番の影響を与えるのは学校の教師である」と言いたいところだが、決してそんなことはない。親が子どもにとっての、最大の教育環境である。

◆母親は、昔の女性の多くがそうであったように、ほとんど「無学」である。学校も満足に行っていないのである。長女であったことで、下の兄弟の面倒を朝から晩までしていた。それが当たり前だった。生きることに必死だった。結婚して、妻となり、母となっても、必死で働いていた。父親の稼ぎだけでは暮らしていけなかったのである。

◆私は、今まで大きな病気をしたことがない。それは今から思えば、母親のお陰だと感謝している。小さい頃の食事は質素だった。魚中心の食事である。あまりにも魚ばかりが出るので、母親に文句を言ったことがある。「今日も、魚。たまには肉も食べてみたい」親不孝の息子の言うことを母親は黙って聞いていた。怒ることもしなかった。悲しい顔で笑っていただけだ。

◆母親の青春時代は、太平洋戦争があった時。そして、父親と結婚しても、家計を助けるために、卵を売り歩き、時には競輪場で働き、時には中華料理店で皿洗いをし、時には靴屋で店先に立って、遅くまで働くこと。そして最後は損害保険会社の代理店をして、多くのお客様に頭を下げて歩いていた。映画「三丁目の夕日」の時代を家族を守るために一生懸命働き続けてきた人生だった。

◆「子育て四訓」という言葉がある。
「乳児はしっかり肌を離すな。
幼児は肌を離せ手を離すな。
少年は手を離せ目を離すな。
青年は目を離せ心を離すな」
年齢に応じた子どもと親との距離の取り方の大切さを述べたものである。今から思えば、私の母親の育て方は、「子育て四訓」のようなものであった。私が母親のことですぐに思い出すことは、私が小さい頃、母親におんぶ紐で背負われていたということである。

私が発熱して、緊急で病院に行く時は、おんぶ紐で背負われながらであった。背負われながら母親の肌の温みを感じていた。今でもその光景を思い出す。

◆日本人の伝統的な子育てというのがある。その中の知恵の一つに「しっかり抱いて、下におろして、歩かせよ」というのがある。母と子の愛着の大切さを「しっかり抱いて」という言葉で表し、母親から離れていく過程を「下におろして」で表現し、自立させていくことを「歩かせよ」で表現しているという。一人ひとりの子を自立に導くことこそ、教育の目標である。人の生き方の根っこにあるのが、家庭であり、母と父の愛情である。昔の日本人はいいことを言った。「三つ子の魂百まで」である。